旭堂南海さん講談

「大坂の陣 ― 幸村VS家康 ―」について

藤沢　毅

本学日本文学会主催の二〇一四年度「文学三昧」において、上方講談師・旭堂南海氏（以下、南海さんと呼ばせていただく）をお招きして、講談「大坂の陣 ― 幸村VS家康 ―」を読んでいただいた（落語は「ハナス」、浄瑠璃は「カタル」、長唄は「ウタウ」、そして講談は「ヨム」なのだ）。南海さんには、ちょうど四年前、二〇一〇年度の「文学三昧」にも来ていただき、その時は尾道に実在した名物和尚である物外不遷についての講談「拳骨和尚」を読んでいただいている。南海さんの紹介、また私がいかに南海さんと知り合ったかについては、本誌第7号（二〇一一年一二月）に述べたので、ご参照されたい。

今回読んでいただいた「大坂の陣 ― 幸村VS家康 ―」は、いわゆる大坂の陣において、大坂方の知将真田幸村と、徳川家康との対決を扱ったものである。そして、こうした場合、徹底的に大坂方贔屓、幸村贔屓になり、反対に家康は大変残念なことになるのである。

こうした大坂方贔屓の文芸は、江戸時代に成育している。実録（文学ジャンル名。「事実」の「記録」のような印象のある語であるが、文学ジャンルとしての「実録」は、事実を標榜しながらも、多くは虚構によって作られている）で、最初に成立したのは徳川方贔屓で書かれた『難波戦記』、しかし、それを元にしながらも完全に大坂方贔屓で書かれた『厭蝕太平楽記』が作られた。そして、さまざまな真田家の軍記と融合し、壮大な長編『真田三代記』が生まれる。さらに水増しがなされた『本朝盛衰記』と、全て大坂方贔屓で描かれている。

その中でも真田幸村はひときわ目立つ英雄として描かれる。『厭蝕太平楽記』の時点で、幸村は大坂の陣で死なないことになってしまう。秀頼とともに薩摩の国へ落ちのびるのだ。

一方、家康がどのように残念な書かれ方をされるかと言うと、とにかく幸村に追いかけ回され、逃げ回る。影武者を含めた七人幸村には、逃げた先々に待ちかまえられる。平野の焼き討ちでは、幸村の仕掛けた火薬の爆発によって吹っ飛ばされる。民家に逃げ込んで匿ってもらったり、あるいは家臣の大久保彦左衛門が必死となって家康を抱え走るのだ。徳川幕府の政権下、東照大権現として神に祭られた家康をとことんやられ役に仕立てたこの実録は、とんでもないシロモノなのである。

実録と講談は近い関係にあった。講談で言う「難波戦記」は、実は実録の『厭蝕太平楽記』に内容が似ている。すなわち、当然ながら大坂方贔屓。家康はなおさら滑稽に読まれる。極端なものになると、家康は後藤又兵衛の鎗によって突き殺され、その後の家康は実は影武者であったとするものもある。

この講談「難波戦記」は、実は南海さんの得意ネタ。南海さん自身、大変勉強をされている。当然、古い講談の資料だけでなく、江戸時代の実録も読みこんでいる。近世の実録研究者で、大坂の陣に詳しい高橋圭一氏の著書、論文はもちろん、私メの論文にさえ目を通しておられる。だからこそ、その講談に深みが生まれる。さらに熟練した読みっぷり。学会では、南海さんの真に迫った読みに皆引き込まれ、あるいは爆笑したことである。講談は、歌舞伎や人形浄瑠璃に比べると芸術性が低く思われがちである。落語に比べても認知度が低い。しかし、こうして生の講談を聞くと、その迫力、巧みさにすばらしい芸術性とプロの技を感じることができるのである。

学会会場でも申し上げたが、二〇一四年、二〇一五年は、大坂の陣からちょうど四〇〇年ということになる（大坂冬の陣が一六一四年、夏の陣が一六一五年）。ＮＨＫは二〇一六年の大河ドラマで、真田幸村を主人公とした「真田丸」を放映するそうであるが、ちょっと遅いんでないかい？　そこへ行くと、本学会で南海さんに来ていただき、「大坂の陣 ― 幸村VS家康 ―」を読んでいただいたのは、たいへんタイムリーであったと自画自賛する次第である。

なお、さすがに大阪では、二〇一四年秋より大阪城公園を中心としたイベント「大坂の陣四〇〇年天下一祭」が行われた。南海さんもこれに関連して引っ張り

だこの大活躍であり、講談はもちろんのこと、例えば『月刊島民　中之島』74号（二〇一四年九月、月刊島民プレス）という冊子には、南海さんの執筆による「講談　大坂の陣」）が載る。

最後に一言。おおさかは江戸時代までは「大坂」と書く。もちろん文献の中には「大阪」と表記したものもあるが、文学や書誌学では「大坂」とし、明治時代以降を「大阪」とする。日本文学科の学生には常識であるが、悲しいかな、世間では知らない方も多く、尾道市立大学の大学案内『尾道市立大学２０１６』では、この学会での講談の題を「大阪の陣」としている。原稿ではもちろん「大坂」、校正でも「大阪」となっていたのを「大坂」と直すよう指示したのであるが、なぜか最終的に「大阪」と記載されてしまった。恥ずかしいことである。

― ふじさわ・たけし　本学日本文学科教授 ―